



見せてあげられる

砕け散るところを

中川大志 石井杏奈 井之脇海 清原果耶 松井愛莉 / 北村匠海 矢田亜希子 木野花 / 原田知世 / 堤真一
監督・脚本・編集 SABU 原作 竹宮ゆゆこ 『砕け散るところを見せてあげる』 新潮文庫 nox 音楽 松本淳一 主題歌 琉衣『Daydream』(DREAM RECORDS)
エグゼクティブプロデューサー 尾形伸太郎 井之脇大 企画プロデュース 八木光吾 フロントワーク 清水光一 制作 廣島草治 アソシエイトプロデューサー 五目圭 撮影 江崎紳生 照明 三浦嘉孝 録音 柳澤征広 美術 林千子 装飾 天野雄哉 衣裳 小嶋和代 (アパレル 橋本由二 スクウェア・エニックス V.F.プロデューサー 谷正樹 喜瀬川 渋谷圭一 キスラックプロデューサー 藤澤浩輔 助監督 川井真人 制作担当 長山慎治 田野雄哉 製作映画砕け散るところを見せてあげる製作委員会 企画制作プロダクション ROBOT 配給 オートンタターメント 2020年映画砕け散るところを見せてあげる製作委員会

4.9 fri ROADSHOW



岩井俊二 (映画監督)

命とはつないでゆくもの。つながってゆくもの。
つなぎ、つながるその瞬間、光り輝くものである。

斎藤 工 (俳優・フィルムメーカー)

SABU監督の元、中川大志さん石井杏奈さん、主演のお二人から放たれる成分に、気が付くと驚くほど深いところまで誘われていた。観終わってから今一度このタイトルを想うと、胸が砕け散りそうです。

新木優子 (女優)

物語の中を生きている石井杏奈ちゃんと中川大志くんの二人が綺麗に重なって、気付けば私も一生懸命に二人の恋を応援していました。真っ直ぐで切ない物語でした。

峯田和伸 (歌手)

2020年のランナウェイ・ホーム。時をかける少年。シャッターの閉まった夜の商店街に僕がずっと観たかった映画のぜんぶがありました。

宇垣美里 (フリーアナウンサー)

人を好きになる気持ちの根幹にある、誰かを幸せにしたいという思い。その思いの持つ強さのなんと美しいことか。大切な人の幸せのために自分を差し出せる人こそが、ヒーローなのだと思った。

カミナリ・石田たくみ (芸人)

よくある高校生の青春恋愛映画かと思ったら、とんでもない！
とにかく話が面白い！ストーリーが「進む」「展開する」というよりは、徐々に「濃く」「深く」なっていく作品でした。
そして中川大志さん・石井杏奈さんの演技が素晴らしく、抜け出せなくなるくらいに引き込まれました。
アリ地獄みてーな映画だな！

はっとり (マカロニえんぴつ)

ヒーローが差し伸べた手は水面を藻掻く悲鳴を救い出していたのではなく、水中で諦めた孤独を掬い上げていたのだとラストで痛く思い知る。

水道橋博士 (お笑い芸人)

事前情報ゼロで観ることをお勧めします。スクリーンドライブの効いた映画。この邦画らしからぬ展開。後半の展開には驚きの連続。SABU監督が邦画のメインに選んできた!!

リリト・シュタンゲンベルグ (女優)

自分の想いを守るため、水の流れるに逆らって泳ぎだす主人公。同調圧力と闘う姿が胸に響く。

釘宮理恵 (声優)

怒涛のごとき竹宮ゆゆ先生ワールド！鋭すぎるナイフでめっちゃくちゃに切りつけられながら、大きくて温かい愛にくるまれるような気持ちになりました。見る人それぞれの心に響くであろう名言だらけです！ぜひ!!

白石和彌 (映画監督)

ずっと口の中に血の味が広がり、押し潰されそうになりながらスクリーンを見つめた。
苦しみの中から生まれる愛の重さに、私はきっと何度もこの映画を見てしまうであろう予感を感じる。
この作品に出会ってしまった中川大志と石井杏奈の二人の役者を途轍もなく羨ましく思う。
SABU監督の渾身の力作だ。

河瀬直美 (映画監督)

石井杏奈の新境地、ここに参上。
ヒーローになりたい人は見るべし。

片岡愛之助 (歌舞伎俳優)

主人公が貫くヒーローとしての姿が羨ましくなるほどに格好良い。その思いが周囲の人々に変化をもたらし、怒涛のクライマックスを迎える。まさに衝撃作だ。

花澤香菜 (声優)

心に痛みを伴いながらも必死に生きている琉璃ちゃんと、眩しいほどの正義感と優しさ溢れる清澄くん。この2人の愛の行方を応援せずにはいられないと思います！
(お汁粉も食べたくなります!)

菅波栄純 (THE BACK HORN)

清澄が境界線を越えて手を伸ばす。特別な力は持っていない。それでも大切な人にとってのヒーローになれることを彼が証明してくれる。俺も清澄のような、真っ直ぐで優しい男でありたい。そして琉璃！こんなヒロインは観たことがなかった。石井杏奈さんの演技、最高!

中村佑介 (イラストレーター)

「40にもなって青春映画なんて…」と気付けば2時間後。目の前には過去の僕が笑っていて、とても恥ずかしくなった。青春とは時期ではなく心の一部のことを指していたのですね。

ウェイン・ワン (映画監督)

本質的な意味でのヒューマンなラブストーリーを持った作品です。

ウルリッヒ・グレゴール (ベルリン国際映画祭フォーラム部門創設者)

素晴らしい体験だった。序盤では、軽快で柔らかいトーンで若い二人のそれぞれの心理描写があり、そこからスピード感を増してドラマが生まれ、心理描写はそこに在り続けながらも映画の雰囲気やジャンルまでもが恐怖映画のような雰囲気に向かって変容する。二人のストーリーに引き込まれる。違った二つのスタイルが互いに重なり合い、この映画が持つ引力を作り出している。夢、恐怖、思い込み、現実、それらの狭間で揺れ動く表現を感じた。また、この映画は日本のごく普通の日常の現実根ざして、それが美しく構成されたひとつひとつ洗練された画の中で表現されている。

